

田中研、別府へゼミ旅行に行く

田中研新聞

第31号

2015年
3月10日発行

2016年3月10日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室 毎月発行
http://catnathn.is.konan-u.ac.jp
編集長：岡田 航大 (B4)
編集委員：吉岡一樹 (M2)



2月21日から2月24日に
かけて3回生3人と4回生
6人と大学院生1人と先生の
合計11人で大分県の別
府ゼミ旅行へ行った。大分
ではホテルで一泊、フェリ
ー内では二泊という変則的な
三泊四日のスケジュールで
あった。行きと帰りのフェ
リーは思った以上に良いも
ので、フェリーの中にお風

呂があったり、バイキング
があったり、ゲームセンタ
ーがあったりと宿泊施設が
そのまま移動しているよう
な豪華さを感じた。バイキ
ングも個人的には大満足で
あったが、欲を言えば部屋
が乾燥しすぎていたのが少
し辛かった。
別府についての朝早
く、朝ごはんを食べながら

レンタカーを借りて3つの
車に分かれて、九重夢大吊
橋へと移動を始めた。私が
運転していた車で少々トラ
ブル(湯布院方向ではなく、
別府の方向へ向かってしま
った)があったものの、事
故なく無事に九重夢大吊橋
へとついた。写真はそこで
撮ったものだ。この九重夢

大吊橋は標高777mの高
さから見る絶景がポイント
で、これは確かに高所恐怖
症などの人にはつらいので
はないかと思うほどの景色
であった。パカと煙は高い
ところの上りたがるとい
言葉の通り、私は高いこ
ろが好きなので、橋が大き
く揺れているのも実は楽し
んでいたのだが。その日の
昼ご飯は海鮮と呼ばれる
お店で、大分名物のとり天
を食べた。この駐車場の
案内の方が非常に印象的
で、楽しく仕事をして
いるのを見て、自分自身の
バイトでの様子などを思い
もよらぬところで少し反省
した。

ホテルに行く前に別府の
観光名所である地獄巡りを
行った。地獄巡りは植物園
みたいなところや動物園み
たいなところと水族館みた
いなところと色々あったの
で、何を見に来ているのか
錯覚してしまうこともあつ
たが、色々な地獄を見て、
ゆで卵(地獄卵)などを食
べて、英気を養った。
ホテルは2種類の温泉が
あり、私は夜は6階にあつ
た展望露天風呂、朝に1階
のメインの温泉に入った。
流石大分!と思えるような
温泉で、非常に良かった。
ホテルの温泉の質も高いの
で、個人的には非常に満足
であった。食べ物も会食で
様々な料理を食べることが
できた。また、夜は希望者
のみではあったもののお酒
を交えて交流を行った。普
段話すことができない内容
なども話すことができ、
非常に爽やかな交流会が
できた。

と呼ばれる九州最大級の水
族館へ行った。これが予想
に反してすごく混んでい
た。須磨水族館の平日と比
べると、数倍の規模で人が
来ていた。はじめのショー
から少し毒を吐く係員の人
が印象的であったが、全体
的に楽しい水族館であつ
た。またその水族館の近く
には猿山があり、その猿山
では触れることができるよ
うな位置にサルがいた。あ
んなに近くで野生のサルを
見るのが初めてだったの
で、少し興奮していた。そ
の後、泥温泉に入るために
また山の方まで上り、泥温
泉に入浴した。一部混浴の
施設だったのだが、メガネ
をしていないと何も見えな
いため、正直何も見してい
ない。
お土産を別府駅周辺で各
々買い揃え、夕方に船に乗
り朝に大阪南港につくと
いった具合であった。やは
り船での長時間移動は疲れ
てしまっていたのか少し体
調が悪かったのが原因なの
か、その日は8時にはすで
に意識がなかった。しかし、
同回生とは学生時代最後の
思い出と呼べるゼミ旅行
は、おそらく私は一生忘れ
ることはいないだろう。

平成27年度は、公私とも
に多忙な1年でした。まず、
「公」としては、学部長2
年目で、部局長会議に出て
大学の方針決定から、
学部内の教授会運営、学部
内のこまごまとしたことの
調整や決定、さらには、学
生の不祥事対応に至るま
まで対応を求められまし
た。その中で、学生指導も
可能な限り力を入れまし
た。皆さんの卒業の指導で
は、5/6回ずつは添削指
導をしました。これが、私
の皆さんへの最大のプレセ
ントです。
一方、「私」のほうでは、
プレミアムプロジェクトで多
くのプロジェクトを提案し
ている関係で、オープンキ
ャンパスなどでは常に大変
でした。当研究室で行った
こと、開発したものが脚光
を浴びるのは大変光栄なこ
とです。ラジオ体操探点シ
ステムでは5回の出張デ
モ、Kororoでは朝日、毎
日、産経、神戸の各新聞の
取材を受け、それ以外にも
いろいろなお客からの連
絡がありました。そうした
華やかな活動とは裏腹に、
今年度は、国際会議に一度
行ったのと、学生が連名で
発表した以外は、時間的・
精神的な余裕がなく、論文
等が書けませんでした。こ
れは、私自身、大きな反省
点であり、それを挽回すべ
く、来年度は研究に没頭し
たいと考えています。さら
にプライベートな部分で
も、身内の病気などがあつ
て、精神的に大きく落ち込
んだ時期もありました。
さて、学生の立場で取り
巻く環境を少し考えてみた
いと思えます。日本の社会
は少子化とグローバル化を
キーワードにして、急速な
変化を続けています。学生

諸君に深いこととい
えば、就職が挙げられるで
しょう。正規雇用が少なく
なり、派遣などの非正規雇
用される就職も年々増え続
けています。給与や身分保
障の点からも、正規雇用さ
れるに越したことはないこ
とは明白です。学生諸君に
は、キャリアデザインIIな
どの科目で職業観や社会構
造、職種などの指導をして
いますが、残念ながら、単
位を取るといふ目的のみで
科目選択をしている学生が
多く、せっかくの貴重(と
我々は自負しています)な
指導を受けていない学生が
後を絶ちません。
学生諸君は、大学で何を
目的としているでしょう
か。大学でいろいろなこと
を学びます。たとえば、英
語をもちろん、使えるよう
にするために習っている
と思います。そういう努力
をしているのでしょうか。グ
ローバルゾーンにいけば、
無料で英会話もできるでし
ょう。ただし、その場では、
能動的に動かなければなり
ません。会話というものは
自分からするものです。そ
ういう当たり前の努力すら
しなければ、グローバルゾ
ーンに行っても、何も会話
はできないでしょう。数学
はどうでしょうか。固有値・
固有ベクトルの意味は分か
っていますか。数学は、教
えてもらうことだけやって
いても使えるようにはなり
ません。常に数学の本を手
に、いろいろな問題を解い
てみる必要があります。専
門科目。90分の授業15回で
教えられることには限り
があります。それに関連する
参考書などを読み、自分な
りに知識の肉付けをしなけ
れば身につけません。
そういうことをやってい
った人は、就職活動できち
んと見てもらえるはずで
す。立派なスーツを着て、
受け答えだけを試験勉強の
ように学んでも、到底就職
活動には間に合わないと思
います。皆さんが受けよう
としているのはアルバイト
の採用ではありません。一
度採用したら、会社は生涯
賃金を2億円くらい払わな
ければならない人としての
面接です。そういうことへ
の対応としては、学んだこ
とを自分の血肉にする努
力と、人間力の増強以外に
はありません。
先輩と飲みながら語り明
かすというような、古典的
な大学時代の過ごし方は流
行らないでしょうが、我々
の学生時代は、そういう場
でモチベーションを獲得し
ていました。どれだけ人と
会話をしたか、どれだけ自
分の頭の中で考え抜いた
か、どれだけ度胸を出して
英語を使ったか、というよ
うなことが、就活の成功の
秘訣だと考えてほしいので
す。英会話がうんぬんとい
う前に、初対面の人も日
本語でもいいですが、まず
話ができるようになること
が先決です。飲み会やパー
ティなどに出るときは、日
ごろ話をしない人と話をす
ることが大切です。いつも
しゃべっている人と同じ話
をしていてもつまらない
し、時間とお金の無駄です。
こうしたことと一言でいえ
ば、「大人」になってくだ
さいということです。
私が今までやってきたこ
とを、田中研新聞の中で披
露してきます。田中研
に入った皆さんは、是非私
の生き方も見てください。
参考になることばかりでは
なく、反面教師という部分
もあるかと思いますが、考
える材料にはなります。
(田中雅博)

年度の変わり目にあたって
平成27年度は、公私とも
に多忙な1年でした。まず、
「公」としては、学部長2
年目で、部局長会議に出て
大学の方針決定から、
学部内の教授会運営、学部
内のこまごまとしたことの
調整や決定、さらには、学
生の不祥事対応に至るま
まで対応を求められまし
た。その中で、学生指導も
可能な限り力を入れまし
た。皆さんの卒業の指導で
は、5/6回ずつは添削指
導をしました。これが、私
の皆さんへの最大のプレセ
ントです。
一方、「私」のほうでは、
プレミアムプロジェクトで多
くのプロジェクトを提案し
ている関係で、オープンキ
ャンパスなどでは常に大変
でした。当研究室で行った
こと、開発したものが脚光
を浴びるのは大変光栄なこ
とです。ラジオ体操探点シ
ステムでは5回の出張デ
モ、Kororoでは朝日、毎
日、産経、神戸の各新聞の
取材を受け、それ以外にも
いろいろなお客からの連
絡がありました。そうした
華やかな活動とは裏腹に、
今年度は、国際会議に一度
行ったのと、学生が連名で
発表した以外は、時間的・
精神的な余裕がなく、論文
等が書けませんでした。こ
れは、私自身、大きな反省
点であり、それを挽回すべ
く、来年度は研究に没頭し
たいと考えています。さら
にプライベートな部分で
も、身内の病気などがあつ
て、精神的に大きく落ち込
んだ時期もありました。
さて、学生の立場で取り
巻く環境を少し考えてみた
いと思えます。日本の社会
は少子化とグローバル化を
キーワードにして、急速な
変化を続けています。学生

修論発表会無事に終わる

院の2年間を振り返って

先日、大学院の修士論文発表会が終わり、大学院の2年間が終了しました。修士論文の発表タイトルですが「移動ロボットにおける人物追尾の研究」です。この研究は学校のプロジェクトでもある「Koro」の開発に関わっています。また、この2年間の多くの時間をKoroの研究や開発に費やしてきました。この2年間で行った内容を紹介します。研究内容は、ロボットが屋外環境において自動で追尾する人物を決定し、その人物を追尾します。また追尾人物を見失った場合でも、追尾人物を認識し、再度追尾する研究です。また、Koroに関して、自分の研究範囲以外でのシステム開発も行ってきました。

例えば、現在Koroは図書館の入口に常駐しています。そこで、図書館入退館におけるKoroの挨拶システムの開発や、Koroの目、耳、舌、しっぽ等の動作の設定等がありました。また、オープンキャンパスでのKoroによるデモンストラレーションに向けて、Koroプロジェクトに関わる後輩たちの指導なども行ってきました。また、この2年間で多くの人と関わりを持つことができた。関わりを持って多量に学校関係者の方々から友人や先生方、学校職員の方、図書館の役員の方、学校の掃除の方など多くの方と関わりを持つことができました。そのおかげで、学べる機会が増えました。

また、目上の方に可愛がってもらい、飲み连接到行ってもらったり、知り合いの人と合わせていただいたりし、研究を続ける励みにもなりました。本当に多くの方々に感謝しています。この2年間で終えて正直な感想ですが「しんどかったです。しかし、この「しんどかった」ですが、僕が大学院に入学する前に、大学院を卒業する時には「しんどかった」と言えるくらい頑張ろうと思っていました。「しんどかった」と言えるということは、それだけ頑張ったと自分に自信がつくと思っただけです。ですから、誰よりも努力して自分に力をつける2年間にしようと思っていました。平日は朝8時に家を出て、

学校には10時~11時に到着し、研究やシステムの開発や実験や勉強をしていました。そして、夜は20時ぐらいに学校を出て、22時ぐらいに家に到着して、また、土日もどちらか学校に行き、研究を進めてきました。修士2回生になるとKoroプロジェクトが大きく変わりました。新しいKoroのハードウェアの設定や、これまでに行われてきた研究の確認など、多くのやるべきことがありました。自分の研究がうまく進まない時や、新しいKoroの設定などもあり、終電で帰ることも多々ありました。また、TAをいくつか受け持っており、次の日のTAの準備や、授業時間にわからなかった問題を休み時間に聞きに来る学生に対しての指導も行っていました。正直に言いますと、何度か学校を辞めた

SIC日本北海道支部

田中研からは須谷が参加

今回、2月29日の北海道大学工学部主催のSICE「第48回計測自動制御学会北海道支部学術講演会」にて研究内容の講演を行いました。講演発表は事前に準備や練習等を行っていたおかげで十分な結果だと感じています。しかしながら、初めての講演ということもあってか質問に対する応答や、発表内容を忘れてしまった時に関してのリカバリーはまだまだ十分ではなかったと反省しています。しかし、今回の講演でただ後悔するのではなく、自分には何が足りないのか、他人との程度進捗が異なっているのか等前向きに考えていく必要があります。折角、他大学から来た方々の質問やアドバイスを多くの意見を取り入れることができたので、次年度の研究、講演会で反映させることができると考えています。

帰りは数年に一度の猛吹雪と重なってしまい、生憎観光等はほとんどできずに帰りの空の便の欠航に不安を感じながら過す北海道の講演会の旅とはなりました。しかし、これもまたいい経験となりました。現在行っている研究に関して今後はKoroの多機能化などの研究に加えて、体育部の教員と共に新

たなプロジェクトなど、さらに多忙な時期となっていくと考えられます。しかし、自分の研究の結果をしっかりとせいにするということは絶対にせず、逆に自分自身への能力の向上や実績を獲得するための時期だと考えています。ですので、次回から研究室に配属される新3回生や、本格的にKoroプロジェクトに参加する新4回生を率先して音頭取りを行っていきたくと思っていますが、一人だけではなく皆が自主的にかつ、今後システムや知識を繋いでいけるように尽力したいと思っています。

(須谷章宣)

田中先生書評

「ハーバード大学はどんな学生を望んでいるのか？」

私はアメリカの大学に詳しくないが、世界大学ランキングでダントツの一位であり、多くの留学生を引きつけているハーバード大学がどんな大学なのか知りたい。この本を手にとってみた。著者は、留学のサポートの仕事を就き、その手腕には定評があるようだ。日本の大学と違う点は多々ある。まず、入学方法。アドミッションオフィス(AO)が合否を決める。AO入試と聞くと、日本にもあるじゃないかと思うが、実は日本のAO入試はAOになっていない。ハーバードの入試は、アドミッションオフィスという部署があり、そこに受験生を評価する専門家がいて、願書の中にある様々な資料を総合評価して合否を決めるというものである。受験生が提出する願書には、宗教や人種、使える言語などを問うプロフィール、親の学歴・職業、兄弟姉妹の詳細、高校でのGPAなどを問う教養歴、ACT、SAT、TOEFLなどのテスト結果、課外活動、エッセイ等である。エッセイは、随筆というより日本という小論文に近いものだが、そこでは、代筆などをすればすぐに見破ってしまう専門家が待ち構えている。この内容を見て驚かない日本人は少ないだろう。本人およびそれを取り巻く人々がすべて評価対象となる。面接もあって、遠隔地の場合には依頼された人がカフェなどで雑談をするらしい。「スポーツ万能、成績抜群、生徒会長を務め、ピアノはシヨパンを弾き、絵を描けば人の心を魅了する、美しい英語のスピーチは聴衆を惹きつけ、世界の環境問題や自国のあり方にも一言を述べような高校生が求められる」(本書81ページより引用)。また、親がハーバード出身の場合の合格率は明らかに高い。人を評価するための方法だと思つてもいいと思うことと

に、日本では決して許されない方法が堂々と行われていることへのショックは大きい。同時に、日本入試制度での、重箱の隅をつつくいや、顕微鏡で細菌を見つけてよとするような、ちまちなとした受験との違いに驚いた。全寮制で、入れば勉強をさせられる。年間納付金は食費を含めて6万ドル(約700万円)。もちろん、それが払えるお金持ちの子息がいることが前提だが、7割の学生は奨学金をもらう。奨学金の申請書には、両親の年収のみならず、納付税額、両親の投資額、借金残高、不動産保有額、年間の家計における光熱費や食費の詳細など、本人及び両親の洗いざらいを申告しなければならない。そうやって入り、勉強した学生たちは、卒業後、半



からこそ多くの方々に励まされ、勇気づけられて頑張ることができたと思えます。また、しんどい時を経験するからこそ、学べるものもあるのだと思います。

編集後記

2月はやはり、ゼミ旅行の半分、本当に楽しかったです。先月も書いたのですが、大学院卒業までに全道府県を制覇すると考えてはいますが、残りの5県はなかなか機会がありません。秋田、群馬、山形、熊本、鹿児島なのですが、実は今年に入ってから熊本と山形はチャンスがあったのですが、他の用事と重なってしまったため断念しました。群馬と鹿児島も比較的観光地は思いつくのですが、秋田がどうしても今はその気になっていません。スキーをしに行くのであれば、北海道の方がかえって安いです。なまはげを見に行くというのが、これがなかなか。行ってみれば楽しいはずなのに、まずはきつかけがほしいです。

ゼミ旅行も終わり、新年度に向けて田中研も始動し始めました。不安も期待も色々あります。学会に5月と6月に続けて出させてもらうことになっていきますが、7月にオープンキャンパスがあることを考えると、5~7月はおそらく休む間もない...と思っただけで、次第であります。しかし、今回の吉岡さんの記事を見てみると「しんどかった」といえる大学院生活を送りたいと思っっています。現段階では、私もまだまだ知識も足りず、論文執筆を行っても先生にご迷惑をおかけすることが多々あります。学部では自身の長所を伸ばすことを意識して、自分の短所と向き合って、そちらを伸ばすことにしようと考えています。これから田中研究室新聞と編集委員をお願いたします。

(岡田航大)

研究室対外予定

3月25日(金) Koroを卒業式モードで動作させる
 ▼3月23日(水) 4月21日(木) グランフロント大阪で、ラジオ体操探点システムと入場者カウンタを展示